



「心理芸術人文学研究所」の概要

2006年度に開設された立教大学現代心理学部は、既存の文学部心理学科を拡充・深化させた心理学科と、映像学・身体学を柱とする映像身体学科の2学科からなり、新たな〈21世紀の人間学〉の創出をめざして発足しました。

さらに現在では、博士課程前期・後期課程を擁する現代心理学研究科もあわせて完備され、心理学専攻、臨床心理学専攻に加えて第3の専攻として「映像身体学専攻」が設置されています。

2010年度より、現代心理学部に附属する研究所として「心理芸術人文学研究所」が設立されました。以下にその概要を説明します。

I. 本研究所のミッション

心を取り巻く現代社会の複雑な環境において人間とは何かを問うとき、身体を考えることはきわめて重要である。人間存在の多様な側面は身体を土台としている。心的病理の解明もまた社会的環境および身体と切り離すことができない。身体における感覚・知覚、認知、運動機能を基盤に、歴史的、社会的文脈の中で心身がいかにかに把握される

かを、総合的に研究する必要がある。また今日の世界では、これに加えて日常生活のすみずみにまで流通するようになった映像が、身体と環境の一部となり、心身のいとなみに深く関与している。

この研究所は、心、身体、環境の相互関係を焦点として新しい人間学を切り拓き、実証科学的知見、人文科学、芸術的創造という三つの領野を横断し融合する新しい知の創造をめざす。また最新の設備や技術を導入しながら、理論面および実践面において、心理学、身体学、映像学、そしてそれらの関連領域にわたる研究の発展に寄与しようとする。

さらに本研究所は、こうした研究・開発の上に立って、優秀な人材の養成、国内外研究機関との活発な研究交流、イベントの開催、先端企業との共同開発、地域への貢献等、さらなる展開を企図する。

また、その研究成果は、現代心理学部及び現代心理学研究科の教育内容に反映され、先端的な問題意識を吹き込み、新たな知見を付け加え、将来のカリキュラム改革にも備えることになる。

(続く)

Ⅱ. 基本的目標

本研究所は、以上の目的の達成に向けて次のような基本的目標を設定する。

1. 心理学, 身体学, 映像学, および関連領域に関する基礎的, 応用的研究を行う。
2. 国内, 国外の研究機関, 諸機関, そこに属する研究者, また様々なジャンルの芸術家, 専門家との連携や協働事業の展開によって研究の推進を図る。また多種多様な外部資金を積極的に獲得することで研究の拡充を図る。
3. 現代心理学研究科と有機的な連携を図り, 心理学, 映像身体学に関する研究者の養成を行うとともに, この分野にかかわる実践的研究者の養成に寄与する。
4. 公開研究会, 公開講演会, 公開シンポジウムなどを開催し, 研究成果を書物や情報媒体を通じて積極的に発信する。
5. 研究のための機器, 設備の導入と管理, 機器や資料等の収集と保管, それらのアーカイヴ化, 公開, 情報提供を行う。
6. 関連する学術・芸術団体, NPO/NGO 組織, 地方自治体, 企業等と連携事業を展開する。
7. これまでの「21世紀社会における「アミューズメント」の理論化と応用に関する研究」(RARC)のユニークな研究活動を発展させ, 新たな研究領域を創出する。

Ⅲ. 研究所を構成する領域

「心理学」, 「臨床心理学」, 「認知科学」, 「身体学」, 「映像学」の5分野を, 主たる研究領域とする。これらの研究開発領域については, 社会の要請や研究科の動向と連携しながら領域の拡充や統合などを行い, 柔軟に対応する。

1)心理学:実験心理学(感覚・知覚, 学習, 認知等), 比較認知心理学, 発達心理学, 社会心理学など心理学各領域の研究を推進するとともに, これらの研究を基盤として社会への寄与を旨とし, 実践・応用領域(産業心理学, 人間工学, 応用行動分析, 障害児[者]心理学など)の研究を展開する。

2)臨床心理学:各種の心理援助技法における認知の再統合と行動統制(セルフ・コントロール)に関する理論的, 実践的研究を行う。同時に, 言葉, 行動, アートによる自己表現の研究と, 地域援助も含めた治療的アプローチの新たな開発も展開する。

3)認知科学:人間の知的システムと感性システムの性質を理解するための学際的な研究を行う。知覚, 学習, 記憶, 言語, 思考, 発達, 感情, 技能, 意識, 社会的相互作用, 人間-機械の相互作用が主要なテーマとなる。近年の認知科学は, ミクロな神経細胞レベルのネットワークに関する研究や, マクロな社会的ネットワーク, 人間と環境との相互作用の検討といった方向に発展しており, これらにも着目する。

4)身体学:人文諸科学(特に哲学, 社会学), 精神病理学, 認知科学, 芸術表現(演劇, 舞踊, 映画, 美術等), 養生論, 武術などを視野に入れた多角的, 横断的な身体論, 身体学の研究をめざす。近年, 内外で関心の高まっている生と身体をめぐる規律や統治をめぐる歴史的, 思想的研究も当面の研究課題とする。

5)映像学:映像作品と映像メディアの人文学的, 社会学的な研究, 映像作品の制作および制作支援, 映像および映像関係資料のアーカイヴ構築など, 映像一般に関する研究・創造・政策提言等を立体的に展開する。また, 先端デジタル技術を用いて, 超高精細動画, 立体視映像, 3次元仮想映像など映像表現と身体表現の新たな可能性を拡大し, その社会的応用と実践として次世代型デジタルコンテンツの制作手法の開発と研究をおこなう。



心理芸術人文学研究所の創立に あたって—イメージの生態学へ—

宇野 邦一・現代心理学部映像身体学科
(2010年度心理芸術人文学研究所長)

2010年度より、現代心理学部および研究科に所属する研究所として、心理芸術人文学研究所を開設することになった。設立を提案した文書では、「この研究所は、心、身体、環境の相互関係を焦点として新しい人間学を切り拓き、実証科学的知見、人文科学、芸術的創造という三つの領野を横断し融合する新しい知の創造をめざす。また最新の設備や技術を導入しながら、理論面および実践面において、心理学、身体学、映像学、そしてそれらの関連領域にわたる研究の発展に寄与しようとする。」とその概要が説明してある。

心理学、身体学、映像学からなる広大な研究領域の課題は数限りなくありうるが、この一年、研究所の運営委員会で重ねてきた議論を振り返り、今後の課題として提案したいことを、いくつかあげてみたい。当然ながら研究所員のそれぞれの専門領域での探求は、このような研究所が存在しなくても個別に持続されるにちがいないので、やはり研究所を作ったことの意義は、様々な形で共同研究を展開し、生産的な対話や交流の場を増殖していくことにある。それがまた個別研究にも還元されて新たな発想につながっていくにちがいないからである。

いうまでもなく〈心〉の問題は、人間とは何かを問うとき、いまも最大の問題のひとつとして浮かび上がってくる。そして心理学、臨床心理学だけが心を問題にするわけではない。哲学、文学、芸術はいつでも心を問題にしてきたし、心理学に隣接する領野として、いまでは認知科学、脳科学、精神分析学、精神医学、社会学などがすぐにも浮かび上がってくる。心理学は実験、実証を旨として、むしろ自然科学的な体系として整えられてきたが、そのような体系において心理をとらえるだけで複雑多岐な心の問題のすべて

をカバーすることは難しい。その点で心理学の成果さえも、他の学や実践から浮かび上がる心の認識に、たえず照らしあわせる必要があるにちがいない。

かつて宗教的価値観にすっぽり包まれていた〈精神〉が、〈心〉として自立し個別化した〈単位〉としてとらえられなければ、心理学のような学も成立しえなかった。デカルトの『情念論』はすでに心理学的である。〈わたし〉という〈主体〉がなければ、〈わたしの心〉も存在しない。つまり〈心〉というような何かは主体として、また対象として現れるには、ある歴史的、社会的な条件が存在しななければならなかった。そしてその条件はたえず揺れ動いている。心理学がそのことを問題にしないなら、他の学がそれを問題にしななければならないだろう。

そして〈心〉の背後には、長い間問われることのなかったもうひとつの領域があった。〈からだ〉という存在は、まったく自明で、ことさら問う必要もないかのように、ただ生きられ感じられてきたが、〈身体は何をなすうるか〉という問いがまるで新しい謎のように浮かびあがってきた。もちろんこの〈身体〉と〈心〉の関係とは何かという問いも、ほぼ同時に浮上したのである。歴史的にはデカルトと同じ世紀の哲学者スピノザが、すでに身体とは何か、真剣に問うている。

それならなぜ〈心〉と〈身体〉に加えて、私たちは〈映像〉を問題にするのか。一言でいうならば、二十世紀に生活・社会環境の大きな新しいファクターとして出現したものが〈映像〉であり、〈映像〉とはそれを受けとる〈心〉と〈身体〉に作用し、まさに心と身体において体験されるからである。映像技術を研究する工学、メディアとしての映像を問う社会学的視野、そして映像芸術を美学的に研究する立場は既に広く存在するが、心と身体をとりまく環境の一大要素としての映像、心と身体において体験される映像という問題を問う学が存在すべきではないだろうか。ここには心理学や映像学や身体学が協同して探求すべき「映像生態学」とでも呼ぶうる新たな領域が浮かび上がってくる。

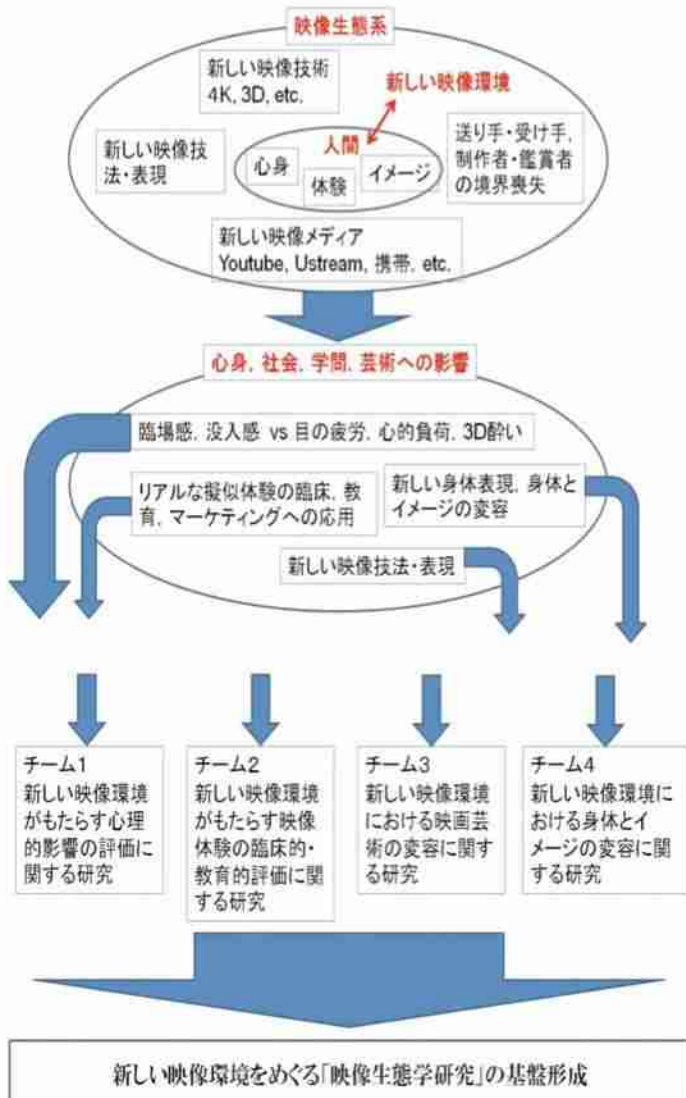
(続く)



2010年度の心理芸術人文学研究所の主な活動は、現代心理学部のこのような核心的問いに照らし、研究を活性化するための外部資金を導入することをめざし、プロジェクトを作成することだった。そこで運営委員がそのまま主導的メンバーとなって議論を重ねた末、「新しい映像環境をめぐる映像生態学研究の基盤形成」と題したプロジェクトを、文部科学省の行う私立大学戦略的研究基盤形成支援事業(平成 23 年度)に申請することになった(下図参照)。このプロジェクトでは、心理学・臨床心理学の知見に照らして新しい映像技術の効能や応用を探求することが骨子となるほか、映像を受けとる知覚の体験を歴史的な視野で研究し、また身体論的な視野で映像体験が何をもたらすかについて研究することも重要な課題となる。

当然ながら、新しい映像の生態学は、人類がどのように映像(イメージ)を生きてきたか、という問いと切り離せない。人類はたえず視覚の対象となる図像や表象を生み出してきたが、それらのイメージは、心的なイメージと不可分なのである。世界、他者、自己、そして身体もまた心的イメージとして存在している。映像はただスクリーンやモニターの上に浮かんでいるのではなく、心身とそのイメージにたえず作用しつつ体験される。そこで私たちは「イメージの生態学」という実に歴大な領域を前にしていることになる。

技術や作品は、次々に生み出され進化を遂げていくが、



それが人類に何をもたらしているのか、必ずしも意識に浮かんでこない。技術も作品も、新しい思考や実践なしには進化をとげることもないので、何らかの新しい意識がそこには含まれ、そのような技術や作品がまた新しい意識を生み出すように作用するのである。ここには意識・無意識をめぐる創造的なドラマが含まれている。そのドラマは場合によっては破局的なものでもある。資本主義、メディア、技術は、人類にとって破局的なものでもありうる。私たちの研究は、そのようなドラマに介入しうる闘争的な試みでありたいものだ。

新しい映像環境をめぐる 映像生態学研究

芳賀 繁・現代心理学部心理学科

今日、映像技術は急速な勢いで革新が続いています。超高解像度映像や三次元(3D)映像の制作技術の進歩、インターネットを通じた映像の通信・配信技術の発展、大画面テレビ受像機や 3D テレビの家庭への普及、個人用・業務用の各種モバイル機器の進化などによって、私たちの周りに新しいタイプの映像があふれています。また、誰もが簡単に使えるようになったデジタルカメラ、ビデオカメラ、3D カメラなどに、誰もが簡単に投稿できるインターネット動画サイトや、携帯電話での映像のやり取りが相まって、映像の制作者(送り手)と鑑賞者(受け手)の境界はあいまいなものとなりました。この状況の中で、映像を制作する技法や、映像を使った表現にも次々と新しいものが出現しています。

このような映像環境(技術、技法、表現、機器、メディアを含む)が、人間の心身や社会関係にどのような影響を与え、どのような体験を人間にもたらし、どのような映像表現・身体表現を生みだし、身体のイメージにどのような変容をもたらすのでしょうか。心理・芸術・人文学研究所では、これらの効果・影響・インパクトについて研究するプロジェクトを計画しました。

研究プロジェクトに関わる研究員は左図に示すように、4つのチームに編成されます。チーム1は、実験心理学、人間工学、映像情報メディア学、映像制作者の立場から新しい映像環境がもたらす心理的影響の評価に関する研究を行います。チーム2は、臨床心理学、産業組織心理学の立場から新しい映像環境がもたらす映像体験の臨床的・教育的評価に関する研究を行います。チーム3は映画学、映画制作者の立場から新しい映像環境における映画芸術の変容に関する研究を行い、チーム4は、身体哲学、精神医学、舞台芸術表現者の立場から新しい映像環境における身体とイメージの変容に関する研究を行います。

本研究を通じて、人間とそれを取り巻く新しい映像環境が持つ様々な有形無形のインパクトおよび潜在的リスクを学術的・実践的に解明し、問題解決を図るとともに、新しい映像技術・技法・表現の方向性を明らかにしたいと考えています。

今期のプロジェクト・チーム会議に 参画して—映像環境と身体表現の 接続点の展望—

大石 幸二・現代心理学部心理学科

本年度は「新しい映像環境をめぐる映像生態学研究の基盤形成」をめぐるプロジェクト・チーム会議に参画した。この会議をつうじて、芸術療法や表現活動をこの研究テーマに照らして見つめ直す機会を得ることができた。私は、映像や画像を用いた臨床心理学的な接近について研究主題の提案を求められた。即座に頭に浮かんだのはエクスペリメンタルな方向性をもつ芸術療法であった。もちろん、インプレッシブな方向性をもつ投影法検査も検討の対象に上った。ただ主観的な体験や自発性・主導性について取り上げたいと考えて、前者を研究主題に位置づけることにした。

映像や画像を用いる芸術療法には、絵画療法・コラージュ療法・箱庭療法に関する実践・研究史がある。しかし、内発的な表現欲求を充足し、情動の適応的発散を促す表現活動は多岐にわたっている。近年では、あらゆる芸術活動への展開が見られる。音楽・演劇・舞踏・文芸はもとより、工芸・陶芸・華道・茶道・書道・美容・園芸などへとその範囲は拡大してきている。それらはことばによる「語り」とは異なる水準の自己表現を保障する。認知症高齢者や高次脳機能障害者などへの臨床的な応用が成功するのも、そのためである。

その一方で、芸術療法には表現を鑑賞することにより生じる心理的効用を活用した技法がある。ところが、このようなインプレッシブな方向性をもつ芸術療法に関する実証研究・実践研究は、報告例がより少なくなっている。望むと望まざるとに拘わらず、マス・メディアをつうじて大量のイメージや体験までもが与えられる現状が続いている。そして、与えられたイメージや体験があたかも「内発的」なものであるかのように感受してしまう。メディアの発達や映像環境の変質は、私たちの感じ取り方や在り方まで変えてしまう可能性を孕んでいる。よって、近年普及しつつあるメディアや媒体を取り上げる必要があると考えた。同時に、そのようなメディアの発達や映像環境の変質により、これまで存在していなかった芸術療法成立の可能性があるという側面も見逃せない。



しかし、このような映像環境の変化が生じて、映像や画像を鑑賞するのは私たちの身体である。また、それらの映像や画像を創りだすのも私たちの身体である。映像環境における主観的な体験を考察する際に、ぜひ個人個人の身体や動作という点にこだわってみたいと思う。自発性や主導性の獲得過程において身体は大きな役割を担っているのではないだろうか。さらに、主観的な体験に対しても身体感覚や自発動作が大きな影響を及ぼしているに違いない。本プロジェクト研究は映像環境と身体表現をつなぐ知見をきつと私たちに与えてくれるのではないか。

そのような期待が私の中にある。

「墨牡丹」のこと

佐藤 一彦・現代心理学部映像身体学科

大正から昭和のはじめにかけて、京都画壇で活躍をした日本画家に村上華岳がいる。その華岳が晩年好んで描いた画題に牡丹の花があった。牡丹は新緑の季節に庭先や寺の境内などに咲く花だが、百花の王と呼ばれるほど花ぶりが豪華で艶やかなわりに、どこか不思議な静けさを感じさせる花でもある。ただ、小さな花弁が沢山集まって丸い手まりのような豪華な大輪をなし、色も赤・白・赤紫・黄などと数多いので、古くから画題として描き甲斐があったのだろう。中国の古い軸絵や日本でも琳派などの作品に数多くみられる。

華岳をはじめ、そんな牡丹の華やかさに惹かれたのか、赤く優美に咲く花姿を鮮やかな色彩で峻烈に描いて見せた。しかしやがて病を得て、死期を感じながら幾枚もの牡丹を描き続けるうちに、最初鮮やかだった色彩はすっかり姿を消し、絶筆となった最後の『牡丹図』では、いっさいの色を用いず、墨一色で牡丹の花が描かれるにいたった。いわゆる「墨牡丹」である。色の直接的表現に目的をおかず、黒白の濃淡とそれを生み出す筆先の微妙な感触だけで花の量感と豊麗さをあらわし、それでいながら、花自体の気品が周囲を圧して、回りを鎮め込むような独特な気配が描き出されている。華岳の眼と腕と技が総動員された「眼力」とでもいうべきか。墨一色であるにもかかわらず、花には薄赤や黄や白の色が透けて見えるようだ。

ものを見て、それを、別の「見えるもの」として描き出すとはどういうことだろうか？ そもそも、ものを見、ものを示し明かすとはどういう行為か？ 言うまでもなく、画家という人びとは古来その命題に取り組んできた。近代になって、写真が出来、映画が出来、テレビジョンが出来たが、それでも繰り返されたのは、やはり、「ものを見」て、それを「別の見えるものに置き換えていく」行為だったように思う。

この研究所を始めるために所員の方々と幾度も議論を重ねたが、その間じゅう、私の気に止まっていたのは、

(続く)

この「別の見えるものに置き換えていく行為」の意味だった。そこで我々はいったい何をしなければいけないのか？何をするのが、ものを見たことの本物の「先に」ある行為なのか？華岳はこの命題に、牡丹の花を墨一色で描くことで、ほんものの花を越える“花のありよう”を示したように思う。見えた花から色や立体感や質感を一度捨て去り、描く側の意識を墨の濃淡に寄せきること、花そのものの居ずまいを明らかにしたように思う。

この研究所で私は、超高精細画像や立体視画像など先端映像と呼ばれるものに取り組むことになる。だが、それら一見最先端に見えるものに取り組みながらも、どうすれば、正しく「ものを見」、それを「別の見えるものに置き換える」ことができるのかを探っていきたくとひそかに感じている。村上華岳が絶筆として残した墨牡丹が、その出発点になるのではないかと今は思っている。

心理芸術人文学研究所の 「人文学」をめぐって

中村 秀之・現代心理学部映像身体学科

心理芸術人文学研究所は、心理と映像身体の両学科からなる「現代心理学部」、および心理学と臨床心理学と映像身体学の3専攻で構成される「現代心理学研究科」と、その探究領域や研究者の外延を共有する組織として、構想され、発足しました。したがって、設立準備段階で「現代心理学研究所」という仮称が用いられたのもごく自然な成り行きでした。とはいえ、「心理学」、「臨床心理学」、「認知科学」をとりあえず「心理」の名で括れるとしても、「映像身体学」は「心理学」の内部に包摂されるものでもなければその外から従属的に貢献するものでもないことは言うまでもありません。さりとして「映像身体学」という新語はそのつど説明が必要でコミュニケーション・コストが嵩みます。複数の領域をカバーする研究所の名称はたとえ散文的であ

っても既知の専門領域をおおまかに併記するのがわかりやすく、国際的にも(特に英語の世界では)そのようなネーミングがおおむね慣行となっています。そこで本研究所の場合、映像身体学が実質的に扱っている対象が「芸術・人文学(arts and humanities / lettres et arts)」の領域に属していることを考慮し、現行の看板を掲げることになったわけです。提案者が直接ヒントにしたのは、ケンブリッジ大学のThe Centre for Research in the Arts, Social Sciences and Humanitiesでした。ちなみに、晩年のエドワード・W・サイードが招かれ、遺作『人文学と批評の使命』(岩波書店)に収録される一連の講演をおこなったのがこの研究所です。

芸術・人文学と社会科学との組合せを特色とするケンブリッジの研究所以上に、心理学と芸術・人文学との協働を促進することをめざす本研究所においては、人文学の意義がいつそう深く問われることになるでしょう。人文学的方法の根幹は、伝統的に、言語活動ないし言語的コミュニケーションの存在を、遡及的にその根拠を問うことができない人間の条件として、いわば公理的前提として立てるものです(この前提は、現代においては哲学者ルートヴィヒ・ヴィトゲンシュタインの「言語ゲーム」論や社会学者ニクラス・ルーマンの「コミュニケーション」論において採用されてきました)。たとえば、作品受容の問題にかんして、あたかも言語活動やコミュニケーションの外部から観察することができるかのように仮定して読者や観覧者の心のメカニズムを解明するといった問題関心は人文学のものではありません。人文学的研究は、人間の制作(ポイエーシス)の所産である作品との相互作用(読む、観る等)が「つねにすでに」生起している事実であることを前提として、そこに徹底的に内在することで、制作—受容のプロセスを反省的、実践的に展開、探究しようとする企てです。人文学にとっては解釈学的循環や文献学的循環が欠陥ではなく、むしろ積極的にそこに身を置くべき固有の方法である所以です。歴史記述(historiography)や作品批評(criticism)のような人文学の基軸をなす営みは、自然科学的発想からはときに「主観的」とも「恣意的」とも見えか

(続く)



ねない面をもつものですが、実は、上述のような確固たる前提に立脚しているものです。

「新しい映像環境をめぐる映像生態学研究」プロジェクトのチーム3は、「新しい映像技術・技法・表現が映画芸術における表現・体験をいかに拡張してきたかを分析し、新しい映像表現を実践的に探究する」ことを課題とします。映画芸術における空間の演出と技術革新との関係に焦点を絞り、創造と批評のダイナミックな相互作用を追求するこの研究は、おのずから人文学的アプローチを採用することになりますが、このような探究と心理学や臨床心理学との協働は、私たちを前代未聞の知的冒険に誘うことになるでしょう。

心理芸術人文学研究所の 新しい可能性

日高 聡太・現代心理学部心理学科

私は、2010年4月より、立教大学現代心理学部心理学科の一員となりました。現代心理学部の前身である文学部心理学科の2005年度卒業生ですので、5年ぶりに母校に呼び戻していただいた形になります。学部となったことで、所属するキャンパスが移転し、学生が大幅に増えたこともそうですが、心理学と映像身体学という2つの研究領域が併存していることに大きな驚きを感じました。

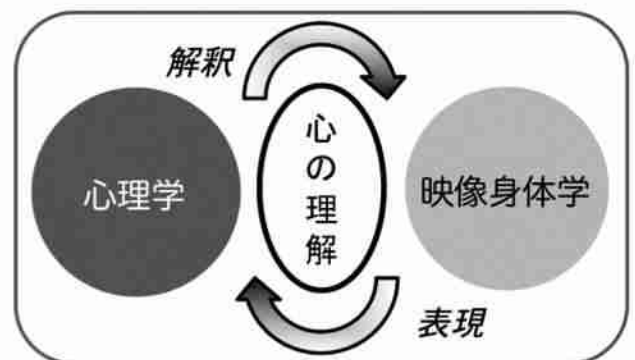
私の専門は知覚・実験心理学です。主に見ること(視覚)や聞くこと(聴覚)、およびそれらの相互作用(感覚間相互作用)について調べています。ヒトは外界に存在する情報をそのまま受け取るのではなく、与えられた物理的入力を脳内で加工・再構成し、知覚や意識の表象を形成しています。この脳内だけに存在する物体や運動に関する表象が、いかに生態的妥当性のある様式で形成され、また他の物理的入力とどのように相互作用するのかについて明らかにしたいと考えています。最近の研究では、視野の周辺で点滅する光と水平方向に移動しているように聞こえる音を同時に提示すると、実際には静止している光が左右に動いて見えるという現象を発見しました。一方、光を視野の中心に提示した際には、音の効果はありませんでした。これは、光が視野の周辺において見えにくくなり、情報の信頼性が低下したときにこそ、音の情報を使って光の動きを「聞く」機能がヒトの知覚システムに備わっていることを示唆しています。

このように、私がこれまで携わってきた研究は、心の機能を、外界からの入力情報を内的に解釈・構築する装置として考えており、この視点は心理学の大きな特徴の1つであるといえます。研究所の所員になると同時に映像身体学という新しい研究領域に触れ、これまでとは異なった視点に触れる契機となりました。すなわち、映像身体学では舞台や演劇、映像作品といった表現技法を通じて、身体を使っていかに個人が持っているイメージ(心的表象)を表現するのかをテーマに研究が行われています。さらに、精

神医学的・哲学的な視点から、身体を通じて現れる様々な動作表現と心の働きとの間の関係性について考察する試みもなされています。したがって、映像身体学では、心の働きについて、内的に保持されている心的表象を身体を通じて出力・昇華するものとして捉えています。

そこで、これら2つの研究領域がどのように相互作用するのかを考えた結果、下図のような模式図が浮かんできました。先に述べたように、心理学は解釈、映像身体学は表現の立場から、心の働きを理解する役割を担うと考えられます。この2つの視点が融合している例として、テレビ・映画の映像提示方式が挙げられます。テレビ・映画では、1秒間に24から30フレームの画像がコマ送りに提示されているにすぎません。しかし、ヒトの時間分解能はそれほど高くないので(50~100ms程度)、コマ送り画像から鮮明かつ滑らかな動画像が知覚されます。このようなヒトの知覚特性に基づいた効果的な映像技法の存在を考えますと、解釈と表現の立場は密接に相互作用すると考えられます。逆もまた然りで、例えば高い感性印象を生み出す芸術表現において、ヒトが実際にそこからどのような情報を抽出しているのかを調べることも可能です。また、相互に知見とノウハウを活かした、連携性の高い研究活動が展開されるはずで、例えば、超高精細映像から生じる知覚体験の内容を心理実験によって明らかにしたいと考えた場合、映像の作成から入手までがスムーズに運びます。そして、映像提供側に観察者にどのような心理的負担が生じるかについて調べたいといった要望があれば、すぐに検討項目に加えることができます。このように、ある研究テーマについて、表現・解釈といったそれぞれの特色を活かし、異なる視点を持ちながら直接的に協力態勢が築ける環境が成立しており、私もその環の中に入って研究ができることに大きな可能性を感じております。

また、演劇や絵画などで激しく心が揺さぶられ場合には、鮮明な内的なイメージや激しい高揚感など、現実場面では経験しないような知覚・感性体験が生じ、個人毎に体験の内容も異なります。このような事例は、ある外的な物理的入力に対して一定の解を返すという心の解釈的側面を超えた、創発的な特性を捉えているのではないかと考えられます。この創発的な側面を研究対象に設定し、実験心理学的な手法に身体学・映像学の視点・手法を取り入れた検討を行い、心の機能の統合的な理解に結びつくような取り組みができればと考えています。



心理学・映像身体学の関係性の模式図

2010年度 主要業績

- 宇野 邦一(訳)(2010). 変身のためのレクイエム. ヤン・ファーブル(著) 書肆山田.
- 宇野 邦一(2011). 喪の演劇. ユリイカ(1月号).
- 宇野 邦一・芳川 泰久・堀 千晶(編著)(2011). ドゥルーズ 千の文学. せりか書房.
- 大石 幸二(2011). 発達障害児の衝動性とセルフコントロール研究の展開. 日本行動分析学会(編) 行動分析学研究アンソロジー2010. 星和書店 pp.123-125.
- 加藤 哲文・大石 幸二(編著)(2011). 行動コンサルテーション実践ハンドブック—特別支援教育を踏まえた生徒指導・教育相談への展開—. 学苑社.
- 大野 久(2010). アイデンティティ・親密性・世代性: 青年期から成人期へ. 岡本 祐子(編著) 成人発達臨床心理学ハンドブック. ナカニシヤ出版 pp. 61-72 ほか.
- 大野 久(編著)(2010). エピソードでつかむ青年心理学. ミネルヴァ書房 pp.1-110 ほか.
- 小口 孝司・竹田 葉留美・原島 雅之(2010). 過去の出来事の想起が抑うつに及ぼす影響. 東洋大学21世紀ヒューマン・インタラクション・リサーチ・センター研究年報, 7, 39-46.
- 小口 孝司(2010). しなやかな社会心理学を—多様な価値観・戦略による発展を目指して—. 対人社会心理学研究, 10, pp. 8-13.
- 香山 リカ(2010). くらべない幸せ ~誰かに振り回されない生き方~. 大和書房.
- 香山 リカ(2010). しがみつからない死に方—孤独死時代を豊かに生きるヒント. 角川書店.
- 香山 リカ(2010). 「今のあなた」で大丈夫! 自分に無理をさせない生き方. 新講社.
- 佐藤 一彦(2010). ドキュメンタリー評伝映画 自然(かむながら)に生きる~保田與重郎の「日本」~. 新学社.
- 佐藤 一彦(2010). 音楽座ミュージカル/マドモアゼル・モーツァルト. 立教大学(制作) 音楽座・株式会社ヒューマンデザイン・西華産業株式会社(協力).
- 佐藤 一彦(2010). 彩の国・四季めぐり. 武蔵野銀行・立教大学(制作).
- 鈴木 清重(出演)(2010). 怪談新耳袋 怪奇. 篠崎 誠(監督)「怪談新耳袋 怪奇」製作委員会.
- 都築 誉史(2010). 言語と思考に関するコネクションストモデル. 楠見 孝(編) 言語と思考(現代の認知心理学3). 北大路書房 pp.81-107.
- 都築 誉史(2010). 日常認知—思い出は変容するか. 箱田 裕司・都築 誉史・川畑 秀明・萩原 滋(編) 認知心理学(New Liberal Arts Selection). 有斐閣 pp.141-164 ほか.
- 中村 秀之(2010). 瓦礫の天使たち ベンヤミンから(映画)の見果てぬ夢へ. せりか書房.
- 中村 秀之(2010). 水俣の声と顔—土本典昭「水俣—患者さんとその世界」について. 黒沢 清・吉見 俊哉・四方田 犬彦・李 鳳宇(編) 踏み越えるドキュメンタリー(日本映画は生きている・第7巻). 岩波書店 pp. 13-35.
- 中村 秀之(2011). 1953-D年. 日本—「立体映画」言説と映画観客. 藤木 秀朗(編) 観客へのアプローチ(日本映画史叢書・第14巻). 森話社 pp. 59-86.
- Nakamura, H. (2010). Ozu, or On the Gesture, (translated by Kendall Heitzman), *Review of Japanese Culture and Society*, 22, pp. 144-160.
- ニジェリスコイ ヴィクトル(2010). 箱に入った男. 国際ダンス演劇祭 in シアターX.
- ニジェリスコイ ヴィクトル(演技指導)(2010). 魔笛, フィガロの結婚(オペラ). シアターX.
- 芳賀 繁(2010). 交通事故はなぜなくなるのか: リスクをとる心(7)~(8). 交通安全教育 4月号, 6月号.
- Hidaka, S., Teramoto, W., Gyoba, J., & Suzuki, Y. (2010). Sound can prolong the visible persistence of moving visual objects. *Vision Research*, 50, pp. 2093-2099.
- Hidaka, S., Teramoto, W., Sugita, Y., Manaka, Y., Sakamoto, S., & Suzuki, Y. (2011). Auditory motion information drives visual motion perception. *PLoS ONE*, 6, e17499.

2011年度 運営委員会

所長

前田 英樹(現代心理学部映像身体学科教授)

運営委員

大石 幸二(現代心理学部心理学科教授)

佐藤 一彦(現代心理学部映像身体学科教授)

中村 秀之(現代心理学部映像身体学科教授)

箕口 雅博(現代心理学部心理学科教授)

事務局

大西 恵

Contact

立教大学 新座キャンパス
現代心理学部 心理芸術人文学研究所

埼玉県新座市北野 1-2-26

TEL: 048-471-7251

E-mail: riarpah@rikkyo.ac.jp